

# 令和3年度 前沢明峰支援学校 全体研究について（中間まとめ）

## I 研究テーマ

### 「児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践・指導実践の取組」

## II 研究テーマ設定の理由

### 1 学校教育目標から

本校は学校教育目標に「児童生徒一人ひとりが個性と能力を發揮し、可能性を最大限に高め、自立的・主体的な生活を送る」を掲げている。（校内研究に関わる重点目標等については【表1】のとおり）

【表1】令和3年度学校教育目標及び校内研究に関わる重点目標、取り組み方針等

学校教育目標	児童生徒一人ひとりが個性と能力を發揮し、可能性を最大限に高め、自立的・主体的な生活を送る
重点目標	児童生徒一人ひとりの能力の伸張を図る教育の実践
取組方針及び指導の重点	児童生徒の主体性を育てる指導支援の充実
取組方針の具体的手立て	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と観点別評価の実施 指導内容・方法の共有と技術の向上

平成30年度～令和2年度の研究（以下、前次研究という。）では研究主題「児童生徒がより主体的に学ぶ姿を目指して～新学習指導要領実施に向けた授業の見直し～」のもと、小中高の各学部においては特に各教科等を合わせた指導の授業実践、寄宿舎においては個別の生活指導計画を活用した具体的・効果的な指導を目指した取組を行った。研究の実際については令和2年度末に研究集録<sup>1)</sup>としてまとめ、本校のホームページで公開している。

前次研究の成果の一つに、研究初年度に全校で確認することができた「本校児童生徒の主体的な学びの姿」【表2】がある。

【表2】本校児童生徒の主体的な学びの姿

- ① 個々のもつ力を發揮して、自ら考え、選び、判断しながら学ぶ姿
- ② 活動内容や自分の役割が分かり、見通しをもって学ぶ姿
- ③ 興味関心ややりがいを持って意欲的に学ぶ姿

ここで、令和3年度からの研究（以下、本次研究という。）を推進するにあたって、学校教育目標に掲げられている「自立的な生活」「主体的な生活」について考えてみる。名古屋（2018）は「自立は、端的に『適切な支援条件下で、自分の力や個性を最大限に發揮してなされる取り組み』と規定することができる」としている。本次研究においては、これを学校における「自立的な生活」に組み込み、「本校の児童生徒が、学校において『適切な支援条件下で自分の力や個性を最大限に發揮』できる』状態」と定義する。また「主体的な生活」については、前次研究において確認された、「本校児

児童生徒の主体的な学びの姿」から、「学校における様々な学習活動の中で児童生徒が『主体的な学びの姿』を日常的に表現できる状態」と定義する。【表3】

**【表3】本研究における児童生徒自立的・主体的な生活の定義**

自立的な生活	学校において「適切な支援条件下で自分の力や個性を最大限に発揮」できる状態
主体的な生活	学校における様々な学習活動の中で児童生徒が「主体的な学びの姿」を日常的に表現できる状態

岩手大学教育学部附属特別支援学校（2018）は『『今』の主体的な生活の積み重ねが将来の主体的な生活の実現につながる』としており、本校の児童生徒においても、学校生活の中で「自立的・主体的な生活」を送ることができる授業実践・指導実践とそのため研究活動を進めていきたい。

## 2 これまでの研究から

前次研究においては、前述の「本校児童生徒の主体的な学びの姿」【表2】や「児童生徒が主体的に学ぶためのキーワード」【表4】を全校で共通理解できた、令和元年度に実施した授業研究会の中で作成したワークシートをテキストマイニングによりまとめた「授業改善の視点」【表5】をもとにした授業改善に取り組んだなどの成果があげられた。

**【表4】児童生徒が主体的に学ぶためのキーワード（前沢明峰支援学校，2018）**

- 考える（考えさせる）
- 分かる（習熟している、理解しやすい、分かりやすい）
- 楽しさ、充実感、期待感、意欲
- 自分で（自ら）
- 見通し
- 選ぶ、決める（自己選択）など

**【表5】授業改善の視点（前沢明峰支援学校，2020）**

- ①児童生徒の実態に合わせた課題設定
- ②児童生徒の主体性を十分に引き出すことができる学習時間の確保
- ③対児童生徒とのコミュニケーションができる機会の保障
- ④自己選択、自己決定の機会の設定
- ⑤児童生徒の表現を引き出す楽しい授業づくり
- ⑥適切な職員配置

しかし、研究内容や研究方法についての課題【表6】も明確になり、本次研究においても、これらを意識した取り組みが求められる。

【表6】前次研究の課題のまとめ<sup>1)</sup>

研究内容について
<p>(1) 各学部、寄宿舎において作成した授業づくりシート等の様式について、今後の実践で活用していくために、様式のさらなる改善に向けた取組や使用方法についての検討を継続する必要がある。</p> <p>(2) 「各教科等を合わせた指導」を各教科等の目標や指導内容から構成する、あるいは「各教科等を合わせた指導」の実践の中から各教科等の目標や指導内容を見取る等、相互の関連を意識した授業づくりが必要である。</p>
研究方法について
<p>(1) 各学部、寄宿舎の研究において様々な実践が紹介されたが、指導する側の手立て等に焦点が当てられた部分が多く、それによって児童生徒がどのように成長したのかが見えにくいという意見があった。実践した内容がどのような児童生徒の成長につながったのを、具体的に、分かりやすく提示できる研究のまとめ方について検討が必要である。</p>

また、令和2年12月に開催した全体研究会において岩手大学大学院教育学研究科の佐々木全准教授から「実際的な研究である」「(全体研究では) どのように研究を進めたか、研究方法の研究がなされている」「研究内容を外部にも発信してほしい」「シートの開発、活用は価値が高い(※)。様式美は重要である。ひと目見て『使いやすいそう』と感ずるかどうかも大切」等の助言をいただき、その後の授業づくりにかかわる講義の中で「よい校内研究とは？」と題したスライド【図1】で校内研究のあり方について指導いただいた。

※ 授業づくりシートについては「①日常的に使用する(基本的に全ての単元で作成する)ものと②年に数回、期間や回数を決めて活用するものが考えられる。①は運用面で難しさがある。教職員の資質向上、研修の意味合いで②を活用する方が現実的で、効果も期待できる」といった内容のお話しもいただいた。

### 3 おわりに (校内研究の方法知)

Q8 よい校内研究とは？

A 得られた「型」が新メンバーの足掛かりになるもの  
(足がかり=思考や作業の遂行をガイドするもの)

A 成果：授業改善に資するもの(目的の実現)

A 経過：わかりやすいもの

\* 論理(因果、順序、具体と抽象)

\* 一貫(専門用語の統一的)

A 参加：研究会、成果物にチームの誰もが関与できるもの

\* 共有(チームの誰もが使いこなせるであろう)

\* 活用(日常的に活用されるだろう、活用によって理解が深まり定着、発展するだろう)

\* 蓄積(今後も応用されるだろう)

「専門用語の統一」について

本校の研究は「手立て」「支援」「指導」、や「主体的な

姿」「主体的に学ぶ姿」など表現が

様々である。「専門用語」

とは「それしか意味しない

語」のこと ⇒ 統一して発信、

共有する表現を持つこと

によりよいチームになる。

【図1】全体研究会スライド「よい校内研究とは？」<sup>2)</sup>

※ 右の吹き出しは講義の記録をもとに大渡が加筆

### 3 校内研究にかかわる職員アンケートから

本次研究の構想にあたり、令和2年度末に本校職員を対象とした校内研究にかかわるアンケート【表7】を実施した。この中の「④研究内容について」はいくつかのキーワードを提示し、その中から研究内容として取り上げてほしいもの選択（複数回答可）する形で回答を求めた。結果を【表8】に示す。

【表7】校内研究にかかわる職員アンケートの主な項目

- ①研究期間について
- ②研究体制について
- ③研究テーマについて
- ④研究内容について

【表8】研究内容に関する職員アンケート結果（複数回答可 N:154）

授業実践	合わせた指導	自立活動	教科指導	総合的な学習
36名 (40%)	29名 (32.2%)	25名 (27.7%)	18名 (20%)	10名 (11.1%)
ICT教育	教育課程	学習評価	道徳教育	その他
10名 (11.1%)	8名 (8.9%)	7名 (7.7%)	7名 (7.7%)	5名 (5.6%)

※その他の回答は「カリキュラムマネジメント」「障がいに応じた特化した手立て」「手立て」「余暇」

ここから、多くの職員が校内研究として「授業実践」を取り上げたいと考えていることが分かる。前次研究で取り上げた「各教科等を合わせた指導」についても30%以上の職員が継続を望んでいるが、「自立活動」や「教科指導」を希望する回答も多く、本次研究においては、学部や学級、個々の児童生徒の実態に応じた、必要な内容を取り上げていく柔軟さが必要であると考えられる。

### Ⅲ 研究の内容と方法

- 1 研究の基本構想と共通理解
- 2 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進
- 3 授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組
- 4 研究のまとめ

### Ⅳ 研究組織

#### 1 研究組織

以下の研究会等については、校長、副校長以下、直接児童生徒とかかわる職員全員の参加を基本とする。（令和2年度年度末反省会で確認）

##### （1）全体研究会 第1回：5月28日 第2回：12月24日

- ① 全体研究の内容、計画、まとめなどについて協議し、その内容を共有する場とする。
- ② 各学部、寄宿舎の研究について意見交換を行い、研究内容の充実を図り、共通理解を進める。

## (2) 学部研究会（毎月）、寄宿舍研究会（年5回）

各学部、寄宿舍の研究を推進する。詳細は各学部、寄宿舍の計画による。

## (3) 授業研究会（年3回 9月：高、10月：中、12月：小）

- ① 各学部の研究に基づく提案授業により、全校での授業研究会を行い、研究内容や推進状況について協議を行う。各学部の児童生徒の実態について共通理解を深める場としても活用する。
- ② 研究協議は小グループによるワークショップ型を基本とするが、授業内容や授業者の希望等を受けて柔軟に対応する。
- ③ 研究会終了後に参加者へのアンケートを実施し、その内容をまとめたものを研究会の記録と合わせ職員に還元し、研究推進に役立てる。

## V 研究計画

本次研究は令和3～4年度の2年次研究とし、年度末にそれぞれの年度の研究のまとめを行う。令和4年度末に研究集録（明峰の実践第20号）を発行する。研究計画を【表9】に示す。

【表9】研究計画

1年次（令和3年度）の研究計画	2年次（令和4年度）の研究計画
1 全体研究テーマ、研究の構想の提案	1 2年次の研究計画の見直し
2 各学部研究、寄宿舍研究の内容、計画の立案	2 授業実践、指導実践
3 授業実践、指導実践	3 授業研究会（年3回）
4 授業研究会（年3回）	4 講演会の実施
5 講演会の実施	5 研究のまとめ
6 1年次の研究のまとめ	6 研究集録の作成

## VI 研究推進にあたって

### 1 学校教育目標等から

#### (1) 学校教育目標から

学校教育目標に掲げられている「自立的・主体的な生活」を送るための「児童生徒一人ひとりが個性と能力を発揮し、可能性を最大限に高め」られる状況について考えてみる。名古屋（2019）は「自立的・主体的生活を実現するために一人ひとりに最適な支援的対応をしていくことが求められます。これを『できる状況づくり』と言います」としており、自立的・主体的な生活につながる最適な支援的対応として「できる状況づくり」を提唱している。また、『『できる状況』とは『精いっぱい取り組める状況』と、『首尾よく成し遂げられる状況』を一人ひとりに的確に用意していくこと。その子なりのよい姿が実現するように」としており、研究テーマに迫る一つの方法として、「できる状況づくり」を意識した実践を進めていきたい。

## (2) 取組方針の具体的手立てから

学校教育目標には「取組方針の具体的手立て」として①主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と観点別評価の実施、②指導内容・方法の共有と技術の向上の2点があげられている。

「主体的・対話的で深い学び」は新学習指導要領において「授業改善の取組を活性化していく視点として」<sup>5)</sup>位置づけられたもので、新井(2019)はこれらを【表10】のようにまとめている。

【表10】「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」

主体的な学び	学ぶことの興味や関心／自己のキャリア形成との関連付け、粘り強い取り組み／学習活動の振り返り、次につながる学び
対話的な学び	子供同士の共同／教師や地域の人との対話／先哲の考えをもとに考える
深い学び	習得・活用・探究という学びの過程／知識を相互に関連付ける／情報の精査と考えの形成、思いや考えを基に創造する

※中教審答申より著者(新井)が抜粋。一部に要約した箇所がある。

また、名古屋(2019)はこれらが「(新学習指導要領で示された育成すべき資質・能力の)『知識及び技能』『思考力・判断力・表現力』『学びに向かう力、人間性等』の3つの柱の習得を図る重要な概念である」としており、観点別評価の3観点である「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」と合わせて、研究の推進にあたってはこれらを意識した授業実践、授業改善、評価が必要である。

## 2 前次研究の課題から

### (1) 研究内容について

- ① 各学部、寄宿舎において作成した授業づくりシート等の様式は、本次研究の内容に合わせた形で活用、改善していくことを目指す。その際、令和2年度第2回全体研究会で岩手大学教職大学院 佐々木全准教授からいただいた助言の「授業づくりシート」にかかわる部分(本資料 P5 34行～37行)を参考にしたい。
- ② 「各教科等を合わせた指導」の実践に取り組む場合は、「各教科等を合わせた指導」の目標や内容を各教科等の目標や指導内容から構成することを意識したり、「各教科等を合わせた指導」の実践の中から各教科等の目標や指導内容を見取ったりする等、相互の関連を意識した授業づくりを行う。

### (2) 研究方法について

実践の報告にあたっては、指導する側の手立て等に焦点を当てるのではなく、そういった手立て等がどのような児童生徒の成長につながったのを、具体的かつ分かりやすくまとめられるよう意識する。

### 3 全体研究会の助言等から

#### (1) 令和元年度 第2回全体研究会

た岩手県立総合教育センターの阿部真弓先生から「研究会の資料の中で『学校教育法が定める学校教育の3要素』『新学習指導要領で示された育成すべき資質・能力の三つの柱・3観点』『観点別学習状況の評価の3観点』の3つが混同されているところがあるので整理と理解が必要である。」とご指導いただいた。【表11】にまとめる。(詳しくは令和2年度に発行した実践研究部通信 No. 157)を参照のこと。) 研究推進にあたって意識づけたい。

【表11】 学校教育法が定める学校教育の3要素等一覧

学校教育法が定める 学校教育の3要素	新学習指導要領で示された育成すべき資質・能力の三つの柱・3観点	観点別学習状況の評価の3観点
基礎的な知識及び技能の習得	知識及び技能が習得されるようにすること。	知識・技能
課題解決に必要な思考力・判断力・表現力	思考力・判断力・表現力を育成すること。	思考・判断・表現
主体的に学習に取り組む態度	学びに向かう力、人間性等を涵養すること。	主体的に学習に取り組む態度

#### (2) 令和2年度 第2回全体研究会

岩手大学大学院教育学研究科の佐々木全准教授から校内研究のあり方について助言をいただいた。(P6【図1】参照) 助言のポイントと前次研究のそれらに該当する内容及び本次研究を推進するにあたって意識したいこと等を【表12】にまとめる。

### 4 職員の研修について

#### (1) 岩手県高等学校教育研究会(高教研)特別支援教育部会講演会について

夏季休業中に標記講演会の開催を予定している。授業づくりに関する内容で講師を招聘し、講演会を行う。

#### (2) 実践研究部通信の発行(不定期)

【表 12】 「よい校内研究とは？」のまとめ

Q よい校内研究とは？	前次研究において該当する内容及び 本次研究の推進にあたって意識したいこと
A1 得られた「型」が新メンバーの足がかり（思考や作業の遂行をガイドするもの）となるもの	研究集録「明峰の実践第 19 号」 研究の成果の活用と課題の改善
A2 成果：授業改善に資するもの	「本校児童生徒の主体的な学びの姿」の定義と共通理解、 「本校児童生徒の主体的な学びの姿」を表すキーワードの例の提示 授業研究会のアンケートから導いた「授業改善の視点」 各学部、寄宿舎の実践とそれらをまとめた資料 授業づくりシート等の様式の作成
A3 経過：分かりやすいもの	
① 論理 因果 根拠を明確に 順序 研究の進め方の過程を分かりやすく	前次研究の内容、先行研究、文献、アンケート結果、研究会の記録を 活用し、どうしてそのように考えたのか、どうしてそのように進めた のか等を説明できるよう、ある程度の客観性を担保すること。
具体と抽象	例えば 具体：授業研究会での提案授業、実践例等 抽象：実践例から導かれた共通する支援の手立て等
② 一貫 専門用語の統一	使用する用語の定義を確認し、人によってとらえ方に差が出ないようにする。
A4 参加：研究会、成果物にチームの誰もが関与できるもの	全体研究会、授業研究会への参加 ※ 研究会への参加については令和 2 年度の年度末反省会において、 「児童生徒に直接かかわる職員は基本的に全員参加すること」を確認した。 研究会でのアンケートの実施とまとめ資料の還元 学部研究会、寄宿舎研究会の実施 研究集録の作成

※ 岩手大学大学院教育研究科 佐々木全准教授のスライドと助言の記録を基に大渡が作成

## VII 研究の実際

### 1 研究の基本構想と共通理解について

#### (1) 第1回全体研究会

5月27日に第1回の全体研究会を実施し、研究会後に研究会の内容及び資料などについてアンケート調査【図2】を行った。研究会の参加者は62名で、当日参加できなかった職員を含め92名から回答を得た。

質問(2)「今回の研究会の発表内容(配付資料の内容)はわかりやすいものでしたか。」に対する回答のまとめを【図3】に示す。

令和3年度 第1回全体研究会についてのアンケート

小・中・高・会 氏名

1 第1回全体研究会に参加できましたか。      参加できた      参加できなかった

2 研究会の発表内容(配付資料の内容)はわかりやすいものでしたか。

1 よくわかった      2 だいたいわかった      3 少しわかりにくかった      4 わかりにくかった

3 研究会の感想、今後の研究会への要望等ありましたらお書きください。

【図2】全体研究会アンケートの様式

	よくわかった	だいたいわかった	少しわかりにくかった	わかりにくかった	無回答
N:92	24名 (26.1%) うち参加22名	50名 (54.3%) うち参加35名	4名 (4.3%) うち参加3名	0名 (0.0%)	14名 (15.2%) うち参加1名
	肯定的回答 74名 (80.4%)				

【図3】第1回全体研究会アンケート「発表内容及び資料は分かりやすかったか」への回答

研究会に参加できた62名の職員のうち57名(91.9%)から肯定的な回答を得、参加できなかった職員を合わせても80%を超える肯定的な回答を得ることができた。また同じアンケートの自由記述においても「前年度の成果や課題をもとに設定されており、分かりやすい」「これまでの研究の流れ、これから取り組むことがよくまとめられている」「文言についても確認がありよかった」などの回答があり、全体研究及び各学部・寄宿舍の研究についての共通理解は得られたと考える。

また、今回は各学部・寄宿舍研究の資料を「概要版」とし、A4版1ページの共通の様式のものを作成・配付したが、この点についても「様式が統一されていてとても見やすく、分かりやすかった」等の記述が見られた。限られた時間内で行われる研究会を、より効率的に進めるための資料の提示の仕方についても一定の成果があったと考える。

その反面、研究会での協議については、「みんなの研究とするため一人一言、発することができれば」「隣の人と自由に話し合ったり、グループで話し合ったりする時間があると良いのでは」、資料については「昨年度の授業づくりシートがどんなものか分からなかった。概要だけでも載せてもらおうとありがたい」等、協議の進め方や新任職員への分かりづらさを指摘する記述も見られた。これらについては、今後の研究会をより有意義なものにしていくための、貴重な提言として受け止めたい。

## (2) 第2回全体研究会（本日）

全体研究及び各学部、寄宿舎の研究について、中間まとめの報告を行い、その内容について協議、意見交換を行う。また、助言者として岩手大学大学院教育研究学科佐々木全准教授を招聘し、研究内容に関する助言をいただく。

## 2 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進

各学部、寄宿舎研究のまとめの報告による

## 3 授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組

### (1) 授業研究会の開催

年度初めの計画に沿って、各学部1回の授業提案による授業研究会を実施した。概要を【表13】に示す。

【表13】令和3年度授業研究会の概要

	研究会期日	内容・対象	単元名	参加者数
第1回 高等部提案	9月22日 (水)	作業学習 調理班	パンとお菓子を作ろう	62名
第2回 中学部提案	10月25日 (金)	作業学習 紙工班	学習発表会での販売にむけて、製品をたくさん作ろう。	50名
第3回 小学部提案	12月10日 (金)	自立活動 訪問学級	なかよし大作戦！ ～リモートであってみよう～	46名

### (2) 授業研究会まとめ資料の作成

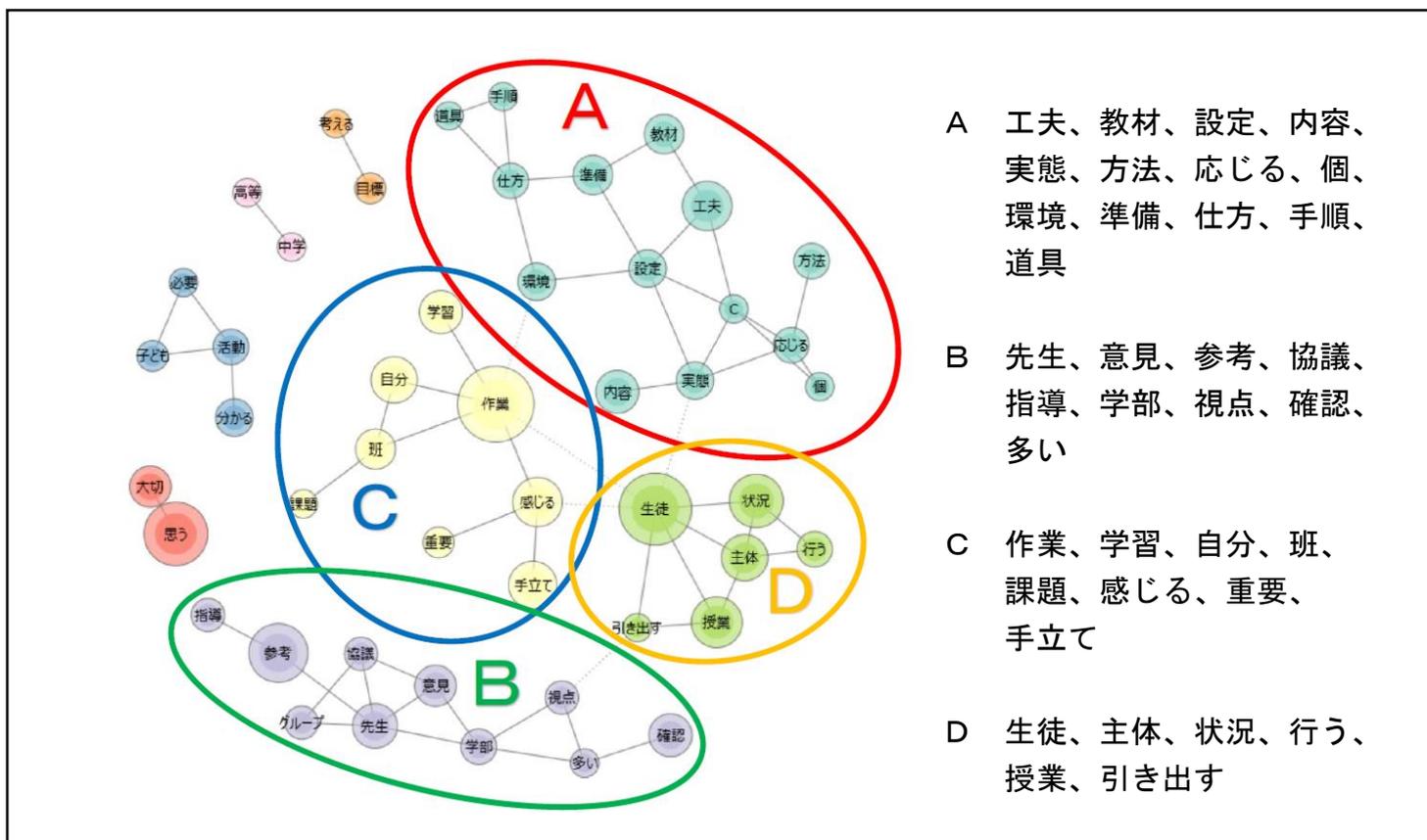
それぞれの研究会において協議された内容と助言をまとめた資料を作成し、校内ネットワークを通じて全職員に配信した。まとめ資料の例（抜粋）を【図4】に示す。その内容については各学部の研究に関わる貴重な資料として活用している。

### (3) 授業研究会におけるアンケートの実施

各授業研究会においては、参加者全員を対象に記名式のアンケートを実施した。様式を【図5】に示す。主な質問は①グループ協議が活発に行われていたか、②授業の成果と課題は明確になっていたか、③協議された内容が自身の今後の実践に役立つと思うかの3点だったが、ここでは授業研究会が参加者各自の学びにつながったかどうかという観点から第1回及び第2回授業研究会アンケートの質問③の結果を【図6】に示す。のべ112名からの回答のうち105名（93.8%）から肯定的回答を得た。

これらの肯定的回答について、具体的内容の記述を求めた質問では、様々な観点から多くの記述が見られた。ここからテキストマイニングによりキーワードを抽出して、共起ネットワーク図（【図7】）を作成し、これらをA～Dの4つにグループ化した。





【図7】肯定的回答の具体的記述から作成した共起ネットワーク図

この図から、今年度の授業研究会における個々の学びをおおまかに以下の4点にまとめる。

- A 実態に応じた学習内容・環境設定の工夫、使用する教材、道具の準備、手順について
- B 学部を越えたグループ協議での意見交換や視点の提示について
- C 作業学習における課題について
- D 生徒主体の「できる状況づくり」について

昨年度の研究集録<sup>(1)</sup>においても、令和2年度の授業研究会アンケート結果から得た個々の学びを6点にまとめている。共通するキーワードも見られるが、昨年度の授業研究会の提案授業が「生活単元学習」2、「作業学習」1であったのに対し、今年度はアンケートの対象となった、中学部、高等部の提案授業がどちらも「作業学習」であったことから「工夫」「教材」「設定」「内容」「方法」「環境」「準備」「仕方」「手順」「道具」等のように、より操作的な活動に直接関わるものが多かったのではないかと考察する。

実施時期の関係で小学部提案の授業研究会のアンケート結果は、この研究の中間まとめには反映されていないが、小学部の訪問学級の自立活動の授業提案による研究会においても、作業学習の授業とは違った学びがあることが期待される。

## 4 職員の研修について

### (1) 岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会講演会の開催

標記講演会は新型コロナウイルス感染症対策のため、校内対応とし、会場を分散させるなどの感染予防措置を取った上で開催した。

- ① 日 時 令和3年7月30日(金) 9:45~11:35
- ② 場 所 前沢明峰支援学校 多目的ホール、職員室
- ③ 講 師 東 信之氏(岩手大学・富士大学非常勤講師、前岩手大大学教職大学院特命教授)
- ④ 演 題 「児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践・指導実践の取組」
- ⑤ 対 象 本校教職員(参加72名)

### (2) 新型コロナウイルス感染症対策経費による研究会等への参加

標記経費の「教職員の資質向上のための研修等支援」の予算措置で参加費の支出が可能となり、4名の職員が以下のオンライン開催の研究会等に参加した。研修報告は11月定例職員会議にて実施済みである。

- ① 全国訪問教育研究会第34回全国大会(Web開催)(8月9日)
- ② 自立活動実践セミナー2021(筑波大学附属桐が丘特別支援学校)(8月28日)

## VIII 研究のまとめ(2年次研究における1年次の中間まとめ)

全体研究テーマのもと、各学部、寄宿舎においてサブテーマを設定して取り組んできた今年度の研究の詳細は、各学部、寄宿舎の研究のまとめを参照いただきたい。ここでは、それぞれの研究の成果と課題及び第2回全体研究会での協議内容や指導助言を受けて、全体研究の成果と課題を以下にまとめる。

### (1) 成果

#### ① 年間指導計画等の作成、目標設定・評価について

小学部においては自立活動、中学部においては作業学習の年間指導計画の作成について、その内容や作成の流れについて吟味を重ね、学校教育目標や個別の指導計画の目標等との関連を意識した計画を立案することができた。また高等部においては学部内で「各教科に分けて考える視点」の共通理解を進めることにより、各教科等の目標や指導内容との関わりを意識した作業学習の目標設定や評価ができ、授業改善につなげることができた。

#### ② 授業づくりシート等の活用について

各学部において前次研究で作成した授業づくりシートの活用や改善に取り組んだ。学部ごとに自立活動の目標や関連する各教科等の目標・指導内容を記載する欄を設定したことが、それらを意識した授業づくりにつながった。また、学部職員の多くがシートの作成やシートを活用した授業実践に直接かかわることにより、学部として目指す授業づくりについての共通理解を進めることができたと考える。

また、寄宿舎においては個別の生活指導計画に基づく、実践記録シートを作成し、その活用により、指導員間で共通理解を進めたり、手立てについての意見交換を行ったりすることができた。

### ③ 授業改善の取組について

各学部において、授業実践を中心とした研究活動に取り組み、小学部においては全ての学級で、中学部、高等部においては全ての作業班で授業実践について検討する機会を得た。それぞれの実践において、授業の成果や課題を明らかにし、改善策について意見交換を行ったことは、今後のさらなる授業改善にもつながると考える。また普段直接かかわることの少ない児童生徒への共通理解を進める機会になったことも一つの成果だったと言える。

### ④ 訪問学級の児童、取組の共通理解について

第3回授業研究会の提案授業として、訪問学級の授業を設定した。現在本校の訪問学級は小学部1学級（2名）のみであり、多くの職員は訪問学級の取組を目にする機会ほとんどない。今回の授業研究会において、リモート形式での授業の様子を全職員で参観し、その取組や児童の学習の様子について意見交換を行ったり、指導助言をいただいたりしたことは、学校全体の訪問教育に関する理解を深めることにつながった。こういった取組は、今後も何らかの形で継続していきたい。

## (2) 課題

### ① 授業づくりシートと各教科等の目標・内容の関連について

各学部において、それぞれの実情に合わせて作成した授業づくりシートを活用して、各教科等の目標・内容を意識した授業実践に取り組んできた。職員アンケート等では「計画の段階での意識付けはできたが実践まで至っていないのではないか」等の意見もあり、今後はこれまで以上に各教科等を合わせた指導の学習内容が各教科等のどういった目標・内容と関連しているのかを明確におさえた実践と評価をしていく必要がある。

### ② 授業づくりシートの様式について

授業づくりシートの様式に関しては、中学部において「生徒の実態が分からない」等の課題があげられた。様式を簡素なものにすることは運用のしやすさにつながるが、必要十分な内容を網羅していなければ、シートを有効活用できず本末転倒となる。小学部においては「単元計画シートと指導案を両方書くことが負担だった。中学部のように同じシートの中に盛り込むなど簡単に書き込める様式がよい」といった意見が出されており、これまでは学部の実情に合わせてそれぞれで様式を作成してきたが、次年度についてはそれぞれの様式の良さを取り入れることで、より実用的なものに改善していくことも必要だと考える。

### ③ 全体研究会での指導助言から

第2回全体研究会において岩手大学大学院教育学研究科の佐々木全准教授から貴重な指導助言をいただいた。助言の内容を大まかにまとめ、次年度への課題と捉える。

- 「できる状況づくり」はICFで言う「環境因子」を整備することである。「できる状況づくり」

の具体的内容を探索、構想するための視点が必要である。これらを「ヒト（伝達と共感）」「モノ（道具と場の設定）」「コト（活動内容と展開）」の三観点で整理することが新たな価値観を生み出すことにつながるかもしれない。また、課題分析（見立て）と実態把握（見取り）が手立ての精度を担保する。

- 手立てについては「事前」「事中」「事後」の時系列における三観点で評価するとよい。
- 支援の手立てとしての「できる状況づくり」は教育目標の実現状況への貢献を持って評価される（効果があったか、どのような機序をもって効果があったのか）。ここでは「児童生徒の学習状況」が「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述される必要がある。

【例】 教師が床に付したラインを指差し「ほら」と声をかけると、それに気がついて脱いだ靴を所定の位置に置き直すことができた。

- 評価の記録については、例えば「自主的・自立的に行動したとき」→○、「注意喚起を要したとき」→□、「行動の指示を要したとき」→△、等のようにすると分かりやすい。

#### 【参考・引用文献等】

- 1) 前沢明峰支援学校（2021）：研究集録 明峰の実践第19号
- 2) 佐々木全（2020）：令和2年度前沢明峰支援学校 第2回全体研究会講義資料
- 3) 名古屋恒彦（2019）：「各教科等を合わせた指導」エッセンシャルブック，ジアース教育新社
- 4) 岩手大学教育学部附属特別支援学校（2018）：第22回学校公開研究会 全体会資料
- 5) 文部科学省（2019）：特別支援学校学習指導要領 解説総則編
- 6) 新井英靖（2019）：特別支援学校新学習指導要領を読み解く「各教科」「自立活動」の授業づくり，明治図書
- 7) 前沢明峰支援学校実践研究部（2020）：実践研究部通信 No. 15（学校フォルダに保存しています）
- 8) 佐々木全（2021）：令和3年度前沢明峰支援学校第2回全体研究会 講義資料